



Title	言語文化学 Vol.8 編集後記
Author(s)	成田, 一
Citation	大阪大学言語文化学. 1999, 8, p. 196-196
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78059
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

編集後記

今年は言語文化学会の母体となる大阪大学言語文化研究科が設立されて十周年に当たり、記念行事も開催されるが、本誌についても表紙および内容を「英文と和文」に区分して、海外諸機関の読者にもアクセスしやすいように改変した。

また、学会発足後8年を経ているが、言語文化学編集委員会の議事進行において、明文化された手続きがなかったことから、従来の慣行、前例などを事務局委員にその都度尋ねるなど、指針が揺れたり時間が浪費されたりする問題が目立った。このため、委員会の協議対象となる個々の事案（「言語文化学会」の発表者の応募・選考規程、「言語文化学」投稿・選考規程や関連文書書式など）を慣例、協議に基づき標準マニュアル化することになった。これにより委員会の議事・事務が円滑かつすみやかに運用されるだろう。

言語文化学については、毎号の編集後記において触れられている。前号では「言語文化部という部局に席をおく言語学者と文学（文化）研究者による旧来の方法に依拠した研究の寄せ集めに過ぎない」との批判がある程度まで正鵠を得ているとした。が、本誌寄稿者のほとんどを占める院生は、特定の研究分野の教官だけではなく、個別にないし研究発表会において、全く違った分野の教官の指導も受けられる。また、文学や言語学、言語教育や言語工学など、色々な分野の院生との情報交換も盛んだ。他に例をみない恵まれた環境の中で、幅の広いそして新しい視点に立った研究ができる。言語文化学という学問が成立するかどうかよりも、旧来の研究機関では得られない「言語を中核とした汎領域的研究」の場を提供していることを評価した方が良いのではないだろうか。（成田）

1999年3月

編集委員会

編集委員

成田 一（委員長）、井本秀剛、坂内千里、細谷行輝、ヨコタ村上孝之、
大谷 朗、高木佐知子、板東美智子、堀井祐介、宮西久美子、
中道静香、河本雅一、翟宝霜、西岡山滋之、松尾 慎